

靴の歴史散歩 ⑩①

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

昭和61年(1986)6月の『かわとはきもの』(年4回発行)に、「靴の歴史散歩」を書き始めてから、今年でちょうど25年、前号の155号(2011年3月)をもって、連載100を数えることになったから、まことにうれしい。初めから長期連載を目指していたわけではないので、よくぞ続いたもの、という思いが強い。

今年は節目の年ということもあって、「靴の歴史散歩」を①から通して読んでみることにした。その結果、④⑧(1998年3月)のところで、意外な誤りを発見、身体中が凍り付いてしまった。正しておかなければ、⑩⑩に汚点を残すことになるし、このままでは前にも進めないなので、思い切って訂正させていただくことにした。

この頃は、明治、大正期の業界誌『皮革世界』に掲載されていた「足の大小」という記事で、今なら個人情報流出で大問題になるところだが、政治家、軍人、実業家、俳優など、当時の著名人の足のサイズが明らかにされていて、めったに見られない、自慢の大発見であった。転記した記事には、まったく問題はなかったが、私がちょっと書き加えた文章に、誤りがあったのだから、何とも情けない。

以下の……は、訂正したい2箇所である。

「さて、相撲といえば、宇野信夫著『ちょっといい話』に、戦後の巨人力士(202cm)大関大内山の靴にまつわる挿話が載っている。NHKのアナウンサーが、国技館で中継放送している時、解

説の玉の海さんに、大内山の足が大きいという話をすると、玉の海さんが『そうそう、あの人の靴の中で、猫が九匹子を生んだくらいですよ』といった。」という話である。台東区立下町風俗資料館に、その大内山の靴をつくったという木型が、幸いにも所蔵されているので、ご紹介したい。」のここまでである。

訂正箇所その一 『ちょっといい話』の著者は、戸板康二である。

訂正箇所その二 台東区立下町風俗資料館の所蔵木型は、戦前の巨漢力士・横綱男女の川のもので、大内山ではなかった。

これからは慎重に取材し、このような過ちがないよう心掛けますので、ご容赦下さい。

写真は、大内山の猫9匹どころか、10匹以上入ってもおかしくない、元大関・小錦さんの靴(35.5cm)である。

常任委員 杉浦啓介氏寄託 皮革産業資料館展示

